



Ommo
Grubeが語る現代スポーツ論に関する反哲学的理解
の試み

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校 公開日: 2016-04-01 キーワード: 作成者: 越川, 茂樹 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00008517 |

Ommo Grupeが語る現代スポーツ論に関する反哲学的理解の試み

越川茂樹

北海道教育大学釧路校保健体育研究室

An Antiphilosophical Interpretation of Ommo Grupe's View of Modern Sport

KOSHIKAWA Shigeki

Department of Health and Physical education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨

本研究では、反哲学的な視点としてのニーチェのヴィジョンを手がかりにして、旧来の「スポーツ精神」と新しい「スポーツ性」の関係性をめぐるOmmo Grupeの現代スポーツ論について読み解くことを試みた。その結果、形而上学的思考様式やそれと連動している物質的自然観を克服しようとする世界観においてスポーツという文化現象をみていく姿勢が、彼の現代スポーツ論の根底にあることが示唆された。また、旧来の「スポーツ精神」や新しい「スポーツ性」が、単に力を獲得するという意味での社会的な競争や達成がひしめく権力の意志としての政治的、経済的な欲望にからめとられるならば、スポーツはその文化性を失墜させて人々から多くの可能性を奪ってしまうのではないかという憂いが彼の見解に見いだされた。そして、スポーツすること自体に生成し流動する、生の意志としての力への意志においてスポーツの文化性を問い質していくことを求める彼の思想の一端が理解された。

1. はじめに

我々とスポーツのかかわりは、「する」「みる」「ささえる」などさまざまである。こうしたかかわりにおいてスポーツは我々の暮らしに浸透し今や文化として認められている。それは今日文化が人々の生活全般を意味する概念として捉えられていることに依るものである。ところで、文化概念が広がったとはいえ、種々の文化は、その文化的妥当性を求められたり、文化性を問われ続けている。有形の文化財ですら、それを維持すべくさまざまな努力をしていることのみならず、有形文化財の文化としての理解を育んでいくことも大切であるという認識とともに、それに努める活動も随所にみられる。スポーツとは、人々がそれを行うことによって立ち現れる現象であり、出来事であり、さまざまな姿を現す、移ろいやすい世界である。それゆえ、スポーツはその文化性を育んでいく努力を欠くことなど考えられないし、スポーツにとって、このことは有形の文化財同様、否それ以上に取り組むべき重要な課題であると思われる。

こうした問題意識を持っている一人に、ドイツにおけるスポーツ教育学の大家にして戦後ドイツのスポーツ科学を牽引した人物であり、世界的にも注目されるスポーツ教育学者Ommo Grupe（以下グルーベと記す）がいる^{注1)}。彼は、スポーツ文化はスポーツ活動の量的な普及とそれに結びついた組織的・構造的変化のみによって変容するのではなく、スポーツを行う人々の動機、スポーツ観、遊びやす

スポーツをする意味とも連動しながら変化している（グルーベ、2004、p.19）と述べ、現代スポーツの量的拡大と質的変容といった動態について常に幅広い視野から見直し、そこに潜む課題を指摘している。

本研究では、こうした現代スポーツをめぐる問題について語っているグルーベの論述『Die neue "Sportlichkeit" und der alte "Sportsgeist" müssen keine Gegensätze sein』（2008）を辿りながら、特に旧来の「スポーツ精神」と新しい「スポーツ性」の関係性をめぐる彼の現代スポーツ論について読み解くことを試みる。その際、反哲学的な視点としてのニーチェのヴィジョンを手がかりとしてみたい。というのも、グルーベの身体論が身体を理性とするとしたあのニーチェの思想^{注2)}と浅からぬ結びつきにより構築されたと推察され、その身体論を基礎とする現代スポーツ（文化）論であり、ニーチェのヴィジョンによって根底に潜む思想を見いだすことができるのではないかと考えたからである。

2. 反哲学的視点としてのニーチェのヴィジョン

哲学とは、いつの時代にもどのような文化圏にも認められる普遍的な知の形式ではなく、西洋と呼ばれる文化圏の特定の歴史的時代に特有で特殊な知の形式を意味するに過ぎないゆえ、いつかは乗り越えられる可能性があるという立場から、それを根本的に転回していこうとする志向

がみられる（木田，1998，p.1303）。こうした志向が反哲学と総称されている。こうした「知の地殻変動」（須藤，2007，p.20）は20世紀を前後して始まり，その先魁にニーチェが位置するという。ニーチェは，形而上学的原理（超自然的原理）によって，自然を捉える思考様式，すなわち，形而上学としての哲学をいかに克服するか企て，挑戦した人物の一人であり，その後の思想家たちに多大なる影響を及ぼした人物である。ここではニーチェのヴィジョンのごく一部，具体的には「力の意志としての世界」といったヴィジョン（世界観）について触れておく。

ニーチェは，精神や理性といった形而上学的（超自然的）な存在を拠点にして，自然に属する身体を一塊の惰性的な物質として，あるいは一束の機械的運動として「侮辱」してきた伝統的な形而上学に反逆して，肉体の復権を説き，それにより形而上学の克服を図った（木田，2004，p.85）。ニーチェは，「本質的なことは肉体から出発し，肉体を導きの糸として利用することである」（ニーチェ，1983a，p.457）と指摘し，精神より「肉体という現象は，もっとずっと豊かで，もっと明確に細分化された，もっと把えやすい現象なのであることを方法的に優先させる」（ニーチェ，1984，p.269）と述べている。また，世界を精神によって認識される相のもとにではなく，肉体によって生きられる相のもとにみるべきである（木田，2004，pp.86）と語られていることから，ニーチェにおいては，世界を解釈する方法として，生きられる肉体をみており，世界そのものをも一つの巨大な肉体として理解していることがうかがわれる。さらにニーチェはこうした世界について次のように述べている。

はじめも終わりもない巨大な力であり，増えることも減ることもなく，消費しつくされることもなくむしろ変化するのみの，不動でがんこな一定量の力であり，支出も損失もなく，しかし同じように増殖もなく収入もなく，自らの限界以外の限界は「何も」もたず，消えゆくでも，浪費されるでもなく，かといって永遠に膨張するでもなく，一定の力として一定の空間に収められ，しかもその空間は決してどこにおいても「真空」ではなく，むしろ力として偏在し，力と，力の波の戯れとして，一であると同時に「多」であり，ここに集まると思うと別のところで引いてゆき，それ自身の中で駆逐し，かつ滔々と流れる力の海原であり，永遠に前進と後退をくりかえし，途方もない年月をかけて回帰し，その生み出す形態は減少するかと思えば充溢し，最も単純なものから発して最も多様なものへ，最も静かで，硬く，冷やかなものから最も灼熱し，荒々しく，自己矛盾的なものへ進みゆき，そしてまた充満から単純なものへ，矛盾の戯れから喜びしき調和へ引き戻り，自らを肯定しつつこの自らの同じ軌道と年月の中にとどまり，永遠に回帰せざるをえないものとして，いかなる飽食も，倦怠も，疲労も知らない

生成として自らを祝福する一

（ニーチェ，1983a，p.427）

その上で，世界それ自体なるものは実存せず，世界とは本質的に関係世界であり，事情により，それぞれの観点によって，さまざまな変貌を持ち（ニーチェ，1983b，p.89），「世界は力への意志であり—それ以外の何ものでもない」（ニーチェ，1983a，p.428）とニーチェは語っている。ここに「力への意志としての世界」が表現されている。その際，力への意志について，その「絶対性は，生の全領域にわたって存在し」（ニーチェ，1984，p.34）ており，それは「非有機体をも貫いており，あるいはむしろ非有機体などは存在しない」（ニーチェ，1983a，p.303）とし，ニーチェは力への意志を原理的に次のように表している。

私は運動の起源として「力への意志」という出発点を必要とする。したがって運動は外から発生せしめられたものではない—原因によって生じたものではないえな
・・・ 私は，そこから力への意志がひろがるころの，運動の諸端緒と諸中心を必要とする・・・

（ニーチェ，1983a，p.92）

ニーチェにとって，力への意志とは，人間の世界に限らない，有機体の世界のみならず，無機体の世界を含めて生成と運動と出来事一般の基盤を示す言葉（茅野，2013，p.368）である。こうしたニーチェの示す力への意志について，あられずりではあるがその特徴を簡潔に整理するならば，それは，地形の形成などの無機的自や人間の身体を含めた有機的生命体の営みなど自然界の至る所で作動し，何らかの主体が持つ意志ではなく，さまざまな時空間において力が働くとき，その及ぶ範囲や強度，質を常により大きくしようと（最大化しようと）する傾向，もしくは勢いであり，そこで働く力は単独ではなく，他のさまざまな力と共在して互いに最大化するのを妨げ合い，拮抗し合っており，その中でさまざまな位置取りがなされる（貫，2007，pp.92-98）動態を示している。

以上のことを踏まえて，「力への意志としての世界」とは「生成と運動と出来事の遊動する時空間として存立し」（茅野，2013，p.375），「おのれ自身をどこまでも力動的に維持しながら，その要素，部分，表出をたえず生成と運動と出来事のただ中に置き，もろもろの個別的表出形態の力関係をさまざまに変容せしめ変転せしめながらも，全体としては潮の満ち引きにもかかわらず定まった定量を保持し続ける力」（茅野，2013，p.376）として理解される。また，「力への意志は解釈する」（ニーチェ，1984，p.187）のであり，ゆえに，世界とは意味と価値の判断の有無により生成すること，つまりは，世界は生の意志により生成流動し実在すると捉えられる。

以下では，こうしたニーチェのヴィジョンの一端からグ

ルーベの旧来の「スポーツ精神」と新しい「スポーツ性」の関係性をめぐる現代スポーツ論を眺めてみることにする。

3. スポーツの量的拡大

スポーツが19世紀初めにイギリスで生まれ、その後ドイツに普及したのは、当時他の多くの人々が必要ないし無意味であるとみなした活動のなかに、「意味」を見いだした、あるいは見つけることができたという事情によるものであり、その事情については、当時の人々が、スポーツをすることにより工場、オフィス、そして「静かに座っている学校」から逃れることができ、新しい（内的）自然との関係を見いだすこと、つまり、運動の自由を、また、例えば、教会のような解釈の権力といった伝統的な強制からの「解放」を体験したことにある（グルーベ、2008、p.40）とグルーベは述べる。この点について、スポーツによって身体という人間的な自然との関係性の正当性を新たに認められた、さらには、新たな世俗的な、教会といった伝統的な解釈の権力から解放された解釈の力が生まれ、近代文化を味方にして身体と関係する典型的な形態の一つとしてスポーツが恩恵を受けた（グルーベ、2008、p.40）とグルーベは指摘する。そこには、人々の身体をめぐる種々の抑圧状態において身体的な自由を獲得していこうとする人々の欲望（力への意志）が生活世界において作動しスポーツが広がっていった状況の把握をみてとることができる。身体や運動に意味を見いだす解釈の力がより大きく、より欲せられ勢いを増していき、近代社会においてスポーツが膨張していった。それが、今やさまざまな組織や施設がスポーツを提供して^{注3)}おり、それにより人々があまたのスポーツをする可能性が増大し、人々のスポーツ活動の仕方が多様になり、それらとも連動しスポーツのとらえ方が拡張している。それがスポーツの量的拡大の姿である。このありようをグルーベはそれぞれ次のように捉えている（グルーベ、2008、p.40）。

スポーツを提供する組織や施設の多様化については、伝統的なスポーツクラブとならんで、商業的なスポーツ提供体が、スタジオ、クラブ、公共施設、そしてレジャーセンターといった形態において、また、それらのみならず、市民大学も教会や社会教育施設もスポーツを提供しているとその状況を述べる。

あまたのスポーツ活動の可能性については、インラインスケート、スポーツカイト、ヨット、スキー、サーフィン、ウォーキング、ヴァンデルン、ツーリング、自転車、フィットネストレーニング、スポーツショップにおけるボルダリングの練習、ニューヨークマラソンへの準備のための旅行代理店のランニングコース、ホテルにおけるゴルフ、スキー場が提供するスキーツアーのような個人的なスポーツ活動のあまたの可能性、観光旅行業における深海潜水やトレッキングツアーや自宅における環境に配慮し、場所をとらな

いヨガや太極拳の実践をあげる。

さらに、人々のスポーツの行い方も千差万別になっていることを次のように語る^{注4)}。

今日、人生の長きにわたりスポーツ活動に従事している人とならんで、単にスポーツ種目を変える人だけではなく、むしろまた、クラブを変更している人、あるいはさまざまなクラブにおける複数のメンバーシップを有している人を見いだされる。クラブと結びついたスポーツの提供、ならびにクラブと結びついていないスポーツの提供を利用する人々も多くいるし、クラブスポーツを全く避けて商業的なスポーツ提供だけを利用し、あるいは森、水上、あるいは山における「自由な」スポーツ活動を好んでいる人もいる。人生において次々にいろいろなスポーツ種目を行うこととならんで、今日スポーツ種目間を行ったり来たりすることも一般的である。例えば、情熱的なクロスカントリースキーヤーであっても、夏にはテニスプレイヤー、自転車乗り、登山家で冬にはスキーヤーでもあり得え、時折スポーツ体験旅行にも出かけるし、フィットネススタジオの顧客でもあり得る。

（グルーベ、2008、p.41）

こうしたスポーツと人々との関係の多様化と連動し、今日スポーツの捉え方もますます拡張する。グルーベは、伝統的なスポーツ種目から健康スポーツ、フィットネススポーツ、レジャースポーツ、心臓スポーツ、腰部スポーツ、膝スポーツ、予防スポーツ、スポーツセラピー、あるいはテレビスポーツまでに及び、散歩や芝刈り、膝の屈伸も「スポーツ」とみなされている（グルーベ、2008、p.41）と語る。このようなスポーツの捉え方の拡張が、ますますスポーツの日常化の生成と流動の勢いを増していく。身体という欲動がさまざまな解釈により、スポーツの世界を創り出していく。そうした世界観がグルーベにおけるスポーツの量的拡大の把握にみられる。

4. スポーツの質的変容

4-1. スポーツの多元化と個人化

このようにスポーツの量的な拡大を支える一つの現象として、人生において一つのスポーツを行うことや一つの動機に固執しないこと、ならびに地域クラブに参加することのみならず、さまざまな活動形態によってスポーツを行うことが、ドイツにおいて珍しいことではなくなっている。スポーツの多様化と個人化は、人々の生活の一部として、内容としてスポーツが浸透していくなかにみられる現象である。こうした動きは、社会における人々のスポーツに対する意味モデル（人々がスポーツに求める意味のまとまり）を多様化する。ドイツにおいては、旧来の「スポーツ精神」が、フェアネス、達成、競争、特に「共同体精神」とクラブの結びつきを志向していた一方で、すなわち、クラブラ

イフと密接に結びつけられていた一方で、新しい「スポーツ性」がそれ以上に拡張していることに現れている（グルーベ, 2008, p.42）とグルーベは述べる。そしてこのことは、今日活動的にスポーツをする人に対して特徴的なだけでなく、伝統的なクラブスポーツが主にまとめてきた社会階層や年齢段階である青少年と中年、特に男性を超えて広がっており、多くの人々にとって、達成、競争への参加、「スポーツ仲間」、「トゥルネンの友愛」、ならびにクラブの結びつきへの志向ではなく、むしろ、彼らがスポーツの中に求める身体経験、身体美、健康、フィットネス、安寧、「楽しみ」への志向でもある（グルーベ, 2008, p.42）とグルーベは指摘する。

このような状況について、一方ではこれまでの組織形態を超えたスポーツ実践の膨張によって特徴づけられ、他方では伝統的なクラブ生活を越えて多くの「スポーツ的」とみなされる意味モデルの拡大によって特徴づけられるスポーツの「脱スポーツ化」と日常生活の「スポーツ化」といった現象において、旧来の「スポーツ精神」から新しいスポーツ性への意味（モデル）の拡張が生起している（グルーベ, 2008, p.43）とグルーベは述べる。その上で、こうしたスポーツの変容過程は、現代社会において、達成や義務の意識に代わる自己経験や「自己実現」の志向、伝統的な労働モラルに代わる、快樂主義的で、多くは利己的な会話、体験、楽しみ、そして娯楽への欲求、共同の意味に代わる単独の意味の志向と連動しているが、それは、多くの人々がスポーツ活動の個性化の可能性を自ら用い、最も純粋に安定した意味の保障として、自らの身体を抛り所にした（グルーベ, 2008, p.43）と語っている。

こうした解釈、つまり、不確かな社会において信用できるものは自分の身体であるという点は、現代社会における身体の復権の思潮、そして、「肉体への信仰はさしあたりは相変わらず精神への信仰よりも強い信仰」（ニーチェ, 1983a, p.378）であるという、あのニーチェの思想に通じるように思われる。人々の生きる欲望により生成した現象がこうした傾向を造り上げているとみてとることができる。

また、何かを体験し楽しむこと、緊張を楽しむことや緊張緩和ができること、ダンスや服装において美を体験し示すことができること、情動的な経験や社会的な接触を斡旋してもらうこと、自らの身体に関して感じられる欠如の調整を達成すること、すなわち、全体として不確かな生活世界において依りどころのようなものを見つけることが意味モデルを関係の安定に向かわせる（グルーベ, 2008, pp.43-44）というグルーベの見解は、現代社会における新しい「スポーツ性」をまとったスポーツの現代社会における力動状況を示しているように思われる。すなわち、身体経験、身体美、健康、フィットネス、安寧、「楽しみ」によって表現される新しい「スポーツ性」といった意味モデルが、スポーツのより大きくなる意志として作動し、現代社会に

浸食していることは、ある意味自然な姿であり、否定されるべくもないということ、ならびにスポーツという世界全体としては、さまざまな意味モデルといった個別的な表出形態の力関係を変容せしめながらも、全体としてはスポーツとしてのまとまりにおいて安定しようとする傾向を示唆していると解釈され得る。

4-2. 「スポーツ精神」と「スポーツ性」の共在

スポーツの量的拡大と結びついたその質的変容を象徴するこのようにスポーツの意味モデルは、今やまとまった意味モデルでとらえられず、多様化している。そしてその多様な意味モデルは互いに折り合いがつかなかったり、見方によっては対立するものであったりという関係性を有していることがグルーベによって語られている。スポーツは世界中の至る所で、競争や達成といったこと一辺倒の伝統的なスポーツ観とは異なり、それらを取り込んだより大きな意味、あるいは新たな意味を付与されながら、まとまりをもったものとしてというより、むしろそのコンセプトが拡散した状態でスポーツ文化という名の下にさまざまな分野と相互にかかわりながらわたしたちの暮らしに浸透している。また、暮らし自体がさまざまなありようを示しスポーツ化して我々を取り込んでいる。

しかしながら、決して、旧来の「スポーツ精神」が新しい「スポーツ性」の増殖の前に廃れてしまったのかといえばそうではない。グルーベは、クラブスポーツの現況としてのクラブの会員数の増加によせて、クラブや独自の意味内容、組織の形や社交の形をともなって多くの人々の希望、動機、そして期待を今なお預かっている点を指摘する（グルーベ, 2008, p.44）。そして、そうした旧来の「スポーツ精神」の根ざした時空間において、スポーツが人間にとって十分な習慣を構築することに役立ち、達成をもたらしてくれることを試すことができ、クラブのなかで社会的関係や「共同体」を体験することをもたらし、身体とのかかわりに対する尺度を提示し、そして、健康に対して何か具体的にを行う可能性を与えるといった点をあげて、それらが、個々人にとって、自らのスポーツ能力、自らもたらす業績、そしてその際経験できる社会的称賛を介した「自己実現の機会」の多くを意味すると語る（グルーベ, 2008, p.44）。

さて、遊びの本質は、「おもしろさ」とであると明示したのはホイジンガ（1989）である。そうした遊びの性格を有するスポーツについて、ホイジンガ、さらにはカイヨワのブレイ論を検討し、マッキントッシュ（1970）は人々の動機や満足性に基づいたスポーツの分類を行っている。グルーベが旧来の「スポーツ精神」としてあげる達成や競争は、こうした文脈において理解される、スポーツ運動のなかで人間的な自然から発現することがらである。すなわち、スポーツのおもしろさ（魅力）に根ざしたことがらにおいて力の増大を欲する状況としての「スポーツ精神」である。

共同体精神についても、ドイツ由来の身体活動との結びつきに起源とする精神であるが、その社会的活動や人々が多くの楽しみを享受する機会を提供することや挑戦を追求する可能性を発達させることを基礎にしているという側面をみてとることができる。

とするならば、「魂とは、肉体に付着したある物を指す言葉に過ぎ」（ニーチェ、1982, p.51）ず、「創造する肉体が、自らの意志の手として、精神を創り出した」（ニーチェ、1982, p.53）のであり、精神はより高い生をめざすための道具に過ぎないゆえに、肉体に包括されるといったあのニーチェのヴィジョンから、旧来の「スポーツ精神」は決して否定されるべくもなく、むしろ、スポーツがスポーツとして人々の生の向上（豊かさ）、より良く生きるといった課題に寄与する可能性は多分にあるとする考え方が導かれ得る。グルーベの旧来の「スポーツ精神」と新しい「スポーツ性」は矛盾しないという指摘、つまりは、それらは、同一のクラブにおいてさえも矛盾しないし、対立もしないのであり、それどころか互いに上手に結びつけられている（グルーベ、2008, p.44）とする見解はこうした文脈において読み取ることができる。

結びの見解として、グルーベは、高級なスポーツ文化は、今日実際、多様で、矛盾ある意味志向がなされ、もたらされ、そして生まれ得るスポーツ像に向かわなければならないし、もしこのことが実現するのであれば、スポーツは身体財、達成財、そして健康財、あるいは権力財に墮落するのではなく、むしろ、高級な意味において、スポーツ的、健康的、美的な解釈と表現の形のなかで身体と運動の文化として発展することを保障されると語る（グルーベ、2008, p.44）。

こうした主張のなかに、肉体から離れた形而上学的原理に従うスポーツへと向かうのであれば、すなわち、旧来の「スポーツ精神」や新しい「スポーツ性」が、スポーツの外側の力への意志、単に力を獲得するという意味での社会的な競争や達成がひしめく権力の意志（政治的、経済的な欲望）にからめとられるならば、スポーツはその文化性を傷つけ、それどころか失墜させて人々から多くの可能性を奪ってしまうのではないかとこの憂いを読み取ることができる。

5. まとめ

ニーチェの力への意志を基盤とするヴィジョンは、自然を生きて生成するものとみる世界観であり、形而上学的思考様式やそれと連動している物質的自然観を克服しようとする企てである（木田、2000, p.235）。こうした世界観においてスポーツという文化現象をみていく姿勢がグルーベの現代スポーツ論の根底にあることが、ここまでの解釈を通して示唆された。

社会においてスポーツが多様化すれば、スポーツが量的に拡大すれば、人々がスポーツに見いだす、ないしは求め

る意味も多様化する。スポーツの意味モデルが多様化・個人化すればするほど、スポーツも多様化し、量的拡大が進む。場合によっては、スポーツは拡散する、あるいは、流行廃りのあわいをうごめく。

そうした様態を示しながらスポーツ文化は今後も膨張するかもしれないが、スポーツがスポーツ自体の自己理解に励み、その文化性を育むことをしていかない限りスポーツは、我々にとって多くの可能性を開示する、より好ましいスポーツたり得ないのではないか。その際、理念からではなく、スポーツすること自体に生成し流動する、生の意志としての力への意志における、スポーツの文化性を問い質し、文化としてのスポーツを築いていく身体性が求められるのではないか。精神の圧制から解放された身体とのかかわりの形態の一つであるスポーツは、生成し流動するメカニズムにおいてその身体と運動の文化としてのありようを人々の欲動の互いの関係性において図式化していくことが求められるのではないか。

スポーツ文化を課題として捉え、こうした文脈においてそれに挑み続けていくことが求められるとのメッセージをグルーベの論述から読み解くことができるのである。

注

注1) グルーベ（2004）は、スポーツが文化として理解されるようになった理由として、一つは、世界規模でのスポーツの普及とそれに結びついたスポーツの捉え方の拡張と、もう一つは規範的な文化理解を超えて広義に捉えられるようになった文化概念の変化をあげている。すなわち、20世紀には、スポーツが世界中へと拡がり文化現象となったことが、スポーツがより良いものへと洗練されたから、あるいは、スポーツの批判者から批判された、粗暴さが取り除かれたからではなく、スポーツが広く普及しより多くの人々に魅力あるものになるとともに、スポーツのとらえ方が変化したために、そして規範的な文化概念が人間の行動様式全般を捉える文化概念の拡張により、スポーツが文化として捉えられるようになったという。しかしながら、スポーツ自らが自己理解においてスポーツの文化性を生み出していくことがなくてはならない（グルーベ、2004, pp.3-34）とグルーベは述べる。

注2) ニーチェは、「肉体とは、すなわちひとつの偉大な理性、ひとつの感覚を持った複合体だ。（中略）君が「精神」と呼んでいる君の小さな理性もまた、わが兄弟よ、君の肉体の道具なのだ。君の偉大な理性が用いる小さな道具、玩具なのだ。（中略）君の肉体には、君の最善の知恵に宿るよりも多くの理性が宿っている」（ニーチェ、1982, pp.51-52）と語っているが、グルーベら（2000）の書籍から、その思想が影響を与えたその後の心身問題に関する研究成果を検

討し、構築されたグルーベの身体論にも息づいている様態が感知される。

- 注3) グルーベ (1991) は、ダルムシュタット市におけるスポーツフォーラムの演者として、「クラブがどのようなスポーツを提供すべきか? - クラブスポーツの自己理解と意味」というテーマの中の「提供する」という言葉に対して、自発的なかわりを基調とするクラブの性格から疑問を投げかけた。
- 注4) こうした傾向は、「スポーツの渡り現象やスポーツ遊牧民」(グルーベ, 2004, p.67) と称されて、現在における人々のスポーツ参加のありようを特徴づけている。

貫成人 (2007) ニーチェ すべてを思い切るために: 力への意志. 青灯社: 東京.

須藤訓任 (2007) 哲学の歴史 第9巻 反哲学と世紀末【19-20世紀】. 中央公論社: 東京.

文献

- グルーベ他: 永島惇正他訳 (2000) スポーツと教育 ドイツスポーツ教育学への誘い. ベースボール・マガジン社: 東京.
- グルーベ: 永島惇正他訳 (2004) スポーツと人間 [文化的・教育的・倫理的側面]. 世界思想社: 京都.
- Grupe, O. (1991) Welchen Sport sollten die Vereine anbieten? -Selbstverständnis und Sinn des vereinsgebundenen Sports. In: Digel, H. (Hrsg.) Wettkampfsport: Wege zur einer besseren Praxis. Meyer & Meyer: Aachen, S.121-134.
- Grupe, O. (2008) Die neue "Sportlichkeit" und der alte "Sportsgeist" müssen keine Gegensätze sein. Zeitschrift des Deutschen Olympischen Sportbundes und der Deutschen Olympischen Gesellschaft, 2:40-44.
- ホイジンガ: 里見元一郎訳 (1989) ホイジンガ選集1 ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み. 河出書房新社: 東京, p.14.
- カイヨワ: 多田道太郎・塚崎幹夫訳 (1990) 遊びと人間. 講談社学術文庫: 東京.
- 茅野良男 (2013) 権力への意志. 渡邊二郎・西尾幹二編: ニーチェを知る事典. ちくま学芸文庫: 東京, pp.366-378.
- 木田元 (1998) 反哲学. 廣松渉他編: 岩波哲学・思想事典. 岩波書店: 東京, p.1303.
- 木田元 (2000) 反哲学史. 講談社学術文庫: 東京.
- 木田元 (2004) 哲学と反哲学. 岩波書店: 東京.
- マッキントッシュ: 飯塚鉄雄他訳 (1970) スポーツと社会. 不昧堂出版: 東京, pp.132-150.
- ニーチェ: 藪田宗人訳 (1982) ニーチェ全集 第一巻 (第二期) ツァラトゥストラはこう語った. 白水社: 東京.
- ニーチェ: 麻生建訳 (1983a) ニーチェ全集 第八巻 (第二期) 遺された断想(一八八四秋-八五秋). 白水社: 東京.
- ニーチェ: 氷上英廣訳 (1983b) ニーチェ全集 第十一巻 (第二期) 遺された断想(一八八八初頭-夏). 白水社: 東京.
- ニーチェ: 三島憲一訳 (1984) ニーチェ全集 第九巻 (第二期) 遺された断想(一八八五秋-八七秋). 白水社: 東京.